

P-111-1

東京 (WEB 開催)、2020.4.23.-26.

社会的妊孕性温存治療 (卵子凍結) の現状と患者背景 ART クリニックからの報告

浅井淑子、貫井 李沙、寺脇 奈緒子、小宮 慎之介、姫野 隆雄

井上 朋子、森本 義晴

HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

当院では、女性の社会進出に伴う晩婚化、晩産化に対応する社会的ニーズにこたえるため、IVF の技術を用いた社会的卵子凍結治療にも対応している。今回当院で対応した社会的卵子凍結治療を希望した患者について、患者背景や治療選択に至る過程、治療経過、患者心理などについて報告し、現代社会で求められる生殖医療の役割について考える。

【方法】

2017 年～2019 年の 3 年間に当院で対応した、社会的卵子凍結希望者について、患者背景、卵子凍結治療の実施の有無、治療成績、治療を受けようと思ったその心理背景などについて問診やアンケートなどを元に解析した。

【成績】

対象者は 75 名で、平均年齢 39.0 歳。パートナーあり 26 例、うち婚姻関係にあるものが 4 例あった。卵子凍結を実施したのは 47 例 (62.7%) であった。平均採卵回数は 1.54 回、卵子凍結数 (中央値) は 8 個であった。全ての卵子凍結は安全に実施され、重篤な副作用は認めなかった。

【結論】

患者背景は多岐にわたっていたが、概ね 40 歳の年齢を意識して受診、将来の為卵子凍結を考慮する症例が多かった。14 例 (18.7%) が、産婦人科医師や助産師からの提案がきっかけであり、我々産婦人科医の果たす役割の重要性が示唆された。全ての卵子凍結は安全に実施され、重篤な副作用は認めなかった。治療実施者・未実施者に関わらず、患者の満足度は高く、今後の人生や妊娠についてより具体的に考えるきっかけになっており、社会的卵子凍結は、その実施については慎重に検討しなくてはならないが、日本女性の抱える社会背景を考慮すれば、その潜在的な要求は大きく、また我々産婦人科医の果たす役割も重要であると思われた。